

特43

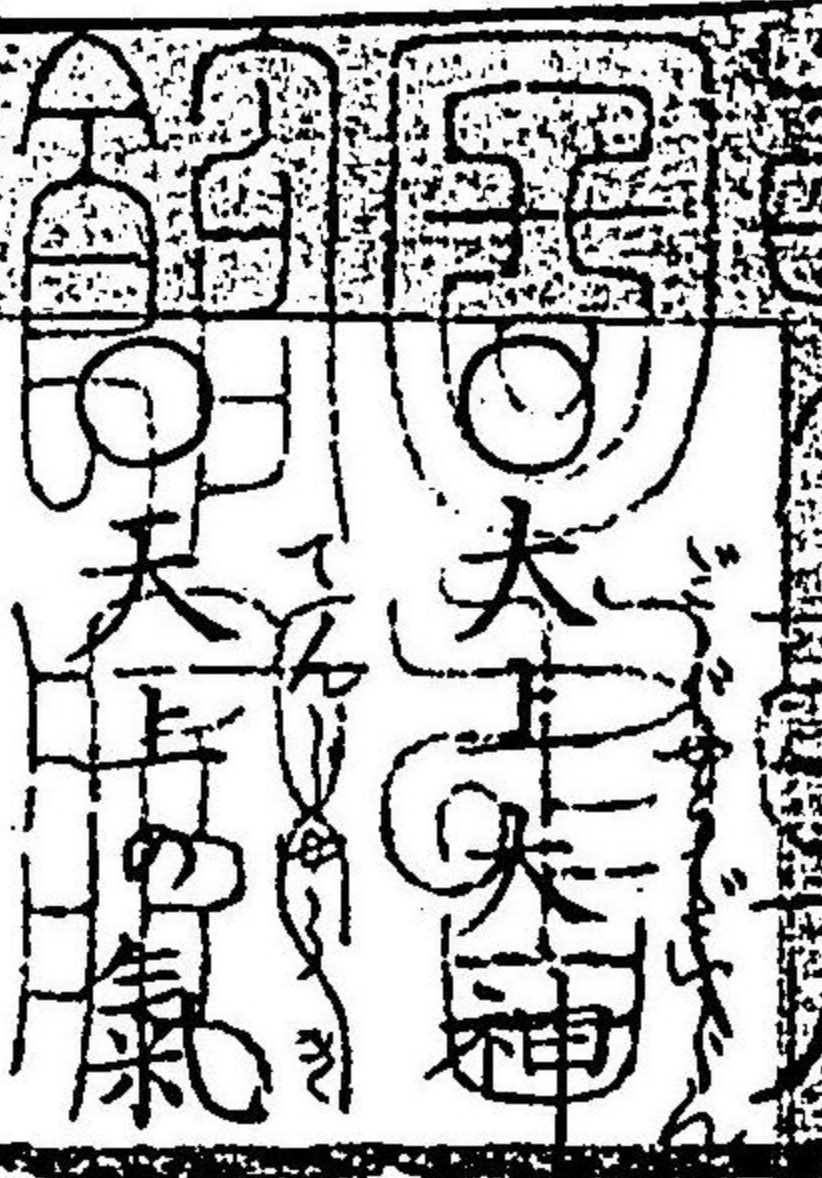
535

Chanpuku  
ルヲラカ天  
Tenkaratumu



昭和十九年三月五日内務省贈付

名所目録



- 大正大神 呂寶の斜市
- 天晴の氣 樂枝
- 金が降里貨の雨
- 勉強山志立小学
- 常盤山の不断櫻

- 質屋川の洪水
- 共同物利足の揚場
- 七谷川途絶の橋
- 万作村の豊年
- 見坊村の大安丸

天カニワレ

ロノ

山の舟

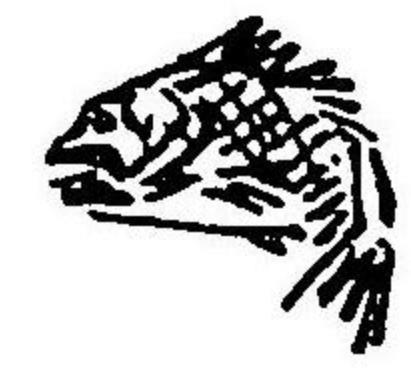
舟次鳥見舟の

舟のさくら

舟の割木

日海

目



万作村の豊年





歌法師

飛田

西行

名所

歌法師



歌法師

歌景 萬福天

万草應賀著

夫日本の天地を動し男女鬼神の心を和らげ夫婦和合を取結ぶものハ吾倭歌止るが也ハ茲

山乃福老人といふ此曲の隠士泰平の代を甘んじて弓馬の家をすて飛田四行と號り花の都の歌杖に出し也ハ先東原の一ノ宮大上大神宮の寶升市を拜見せんと幣取あへず夫へ趣きて見ればかけまほくも賢ら宮柱ふとしく立て美麗四方にかややけども氏子の活業とする寶の升市は誠に慈然として殆ど物淋しく門並の商人らがまけたくの大騒も力まけして今ハ枯野のきりくすとなる其中に鳥居の側ある升屋歌法師の袖を引とめて「現花の都ハ歌米各國の都に立ちらぶ幅濠第一の寶の升市なるが御覽の如く近年の不印にて何れの升屋も升く困り升也へ金も升智恵も升得慮も升鬱も升此金升を不景氣の直り升縁喜ふ其方に限りて元直を引升也へ是非ともお承あり升やうに願ひ升拜と升と升尽一の押資を歌法師ハ聞て嘆息し「夫は誠ふ氣の毒な事ながら又生米も噛めれハ味のあるところを思ひて氣と堰らずに何處

歌法師

飛田

西行

名所

歌秘節



一

東景萬福天

歌

夫日本の天地を動し男女鬼神の心を和らげ夫婦和合を取結ぶものハ吾倭歌止るが也ハ茲

一ノ宮大上大神宮の寶升市を拜見せんと幣取あへず夫へ趣きて見

ればかけまくも賢さ密柱ふとしく立て美麗四方にかやけども氏子の活業とする寶の升市

は誠に愁然として殆ど物淋しく門並の商人らがまけたくの大盛も力まけして今ハ枯野の

きりくすとなる其中に鳥居の側ある升屋歌法師の袖を引とめて「我花の都ハ歌米各國の

都に立あらぶ幅濠第一の寶の升市なるが御覽の如く近年の不印にて何れの升屋も升く困

り升也へ金も升智慧も升得慮も升鬱も升此金升を不景氣の直り升縁喜ふ其方に限りて元直

を引升也へ是非ともお衆あり升やうに願ひ升拜と升と升尽一の押賣を歌法師ハ聞て嘆息し

「夫は誠氣の毒な事ながら又生米も噛めれハ味のあるところを思ひて氣を堰らずは何處

万亭應賀著



新  
上  
下



願 辨 雀

東京  
一  
大  
七  
大  
神  
宮  
寶  
物  
所

天  
照  
太  
神  
の  
御  
衣  
の  
御  
裳

新  
法  
師  
飛  
田  
西  
行

月  
新  
二

秋の夕暮と外を羨す内を守りて居うちには能事か回りくるなり此氏神の萬民の父母たる也  
へ各々一方の我代理となつて神前へ起死回生の歌を備へなば必ず納受ありて再び實の升市  
の繁昌する事疑ひなければ夫を市中の商人へ告て何れも其歌を待べしと示しつゝ神前へ  
捧げたる歌に

○天照す市の升屋が困り升さうかよろしく願ひ上り

ト讀て夫より大神宮の御神木なる天上の氣樂杉の根元へ來りて上と仰ぎ見れば此杉は雲の  
上へ貫けし長大の神代杉なれば此梢へ照降しらすの内外の天人天狗の聲が寄集りて歌謡の  
菩薩迦陵頻伽と一座して觀喜苑の快樂を尽す天上なしの桑花を歌法師の遙望して消息をつ  
き「ア、天は貴く地の賤しきものとすれども斯の如く同時の天地に盛衰の懸隔なるを目前  
に見るハ甚だ遺憾なり夫天地陰陽の二ツは混沌の一元より別れたるものなれば陽の不足は  
陰を加へて季候を補ひ陰不足の時ハ斯の如き天の有餘を以て地の不景氣なる危急を救ふは  
法師の義務なりと森々かんかんたる氣樂杉の梢へむかひて讀上たる歌に

○照ふりもなき天人の氣樂杉 雲の下枝五葉置われ

ト讀後、又近年地下の家々に所有して割木を割くだきて籠の洞門を齧して家内の生身魂を  
祭る人間第一の斧を天狗にとられ天上の 翫ものとなりし也へ地下の家々ハ其割木を割  
碎く斧がなければ三食の燈りをも立たたく庭に割木を積かさねて石牛五丁の溜屋を以て咽  
佛を供養するを歌法師ハ見るに忍ず其天上の斧と取下して地下の諸親へ普く授んと讀たる  
歌に

○上ばかり斧と持とてよきものう下の割木とわるも斧なり

ト讀上ければ喜見城の帝釋天王此歌を聞て驚き俄木の棄天狗を除きて大中の天狗を召集  
められ臨時の會議を立けるに議長の大天狗の議決は萌出るも枯るも同じ秋の神天人天狗  
として終に五葉あらざる、よ至れば天上の桑花ハ石にぶぶり付ても叶ひがたく昨日の快樂ハ  
けふの夢と覺て雲下へ墮落し下民平等の交際を結ばねばならぬ處と思ひて皆々早く斧と雲  
下へ投下すべしとある大天狗の一語ハ皆惜きものと思へとも目前の利を後の資にせんと  
投捨ければ是を雲の下人は普く得て家々に積かさねたる割木を悉く割尽して斧世となるは  
近きにあり偕歌法師は件の歌を讀上てたゞちに神廟の東門を下り金が降里といふ名所へ



天の御  
鳥樂

歌

上より命を

下の刻本

谷多理

至りて見れば里の名の福貨に違ひて諸人の新業閉窮すれば陽屋理髮床にても不景氣と安芝居との噂より外なきを歌法師聞て眉をひろめ「世柄のあしきは兼て覺悟の歌枕なれども名にしれう花の都の中に斯の如き醜態をしばく見聞すると思はざりし起にては天道人を殺すりと天上を見上しが忽然と喜悅の色を含まるゝ明治十八年八月廿四日より引續き大藏省にて焼樂たる巨萬の金札の煙り外國の空へも吹流れず内國の空に懸懸けるゆへ昔能因法師小野の小町晋の其角が雨乞の歌發句を以て枯たる民艸を活したる例にならひて此天上に充滿する金氣を世上通用の金銀銅貨に換て下界へ雨ふらせ閉塞する此里の門戸を開かせて裏屋に同居する貧民迄を一夜に大福長者と爲んとする慈仁の憤發より元良親王の惡魔退散の鬼打豆を時が如き大聲を以て虚空へ讀上たる金乞の歌に

○焼すてし紙幣の煙の空ならば 費金雨ふれどつかふれく

ト讀たればアラ不志識や歌の徳に臆臆たる闇雲は八方へ散亂して金銀二色の雲一面に蔓延しけるを氣象察にては是を見る鏡なく蛇の道地穴を穿つ新聞探訪者といへども是を知と能はざりしが終に明治十九年新陽來福日の寅の一点より金銀銅貨の通貨雨窓の如くに降



大藏省

紙幣の

焼棄



歌

紙幣の

煙りの

黄金雨ふれ

ふれ

ふれ



いだしければ或家のね三殿の寐間へ走り來りて「旦那様大變な御目出鯛ことが降て  
 きました私がお難煮の芋洗ふ上の引窓から此やうな金銀のお年玉がふりこんで始て結だ  
 東髪（そくはつ）の天窓へ當りこんな悦（よろこぶ）齋（い）がでましましとへ早く引窓の切（き）た紐（ひも）を結んで下さらぬとお登  
 處の一面に金が振こんで困り升といふと聞より旦那は飛（と）ねき「金が降てきたを見て引まど  
 を（し）める馬鹿があるものかと云つゝ庭へ出て空を詠め借く悪（わる）ひ跡は善（よ）と（い）ひ能も譬へし今斯  
 の如く降（ふ）此金が賣（せ）て去（き）暮（くれ）にでもふるものなら此里の人々と大晦日の難所を鼻唄（はなうた）ふて越もの  
 を氣のきかぬ降やうといふ勿（な）体（たい）なひ今年（ことし）の又火（ひ）でも振（ふる）のと思ひし空より此様な寶（たから）いふる  
 は前代未聞（ぜんだいみもん）と空に見とれて居うち此家のお内儀（うちか）さんは芥取（かゐり）と抄子（しやうし）を携（も）へて庭に振積（ふる）る金銀  
 を掻集（か）めながら「コレお前さんとした事の何となくしていすとも早く手桶（たづ）でも盥（たらい）でも  
 何でもかでも有たけの物を取（と）出して此金銀の解（と）ぬうちに銀行へでも郵便局へでもお預（たく）りな  
 さへ利足は安くとも手桶（ひやく）に百（ひゃく）益（えき）も預ければ家内中が稼（かせ）がまに寐（ね）て居て樂（たの）に暮（く）されますと血  
 眼（まなこ）になつてせき立（た）れを「イヤ甘やうに周障（しやうじやう）と（い）ひなひ此空合（このあ）では五日や十日では降（ふ）止（と）けし  
 とも無（な）れバ銀行でも郵便局でも此方から預けに行を待（まち）はせまひ定めて是迄の預り金百圓の

元金へ利足を百倍も付て押戻しに來るべし夫のみならず先年より萬年帳へ附替にした諸方  
 の貸倒（かした）も此様子にては金の耳を揃へし上に年利を添て取込（と）れをもする時は内外の金の置處  
 がなきもへ夫を最前より心配せしが今漸く考へ付一能仕向（よせし）といふは此庭中へ堀（ほり）板井戸（い）を敷  
 多（た）も堀（ほ）せて其中へ貯（たくわ）へ置（お）け火事盗人の用心もよく夫と次第に堀（ほ）せば（は）襪（は）虎（こ）の皮（かわ）でも緋（ひ）の袴（はか）  
 でも花見でも芝居でも勝手な事が孫子の世迄も出來るといへば（は）か（ま）さん（の）莞（わ）り（と）して売  
 俵（たば）を取（と）出し「傘（かさ）にては逆（さか）も凌（しの）がれぬとへ是を冠（か）つて早くお出なさへと渡せば何奈（いか）にもと其俵  
 をかぶりて二三寸ふり積りたる全銀銅貨と踏越（ふ）て井戸屋へ趣く大變な目出たい代とはなり  
 ける是は何ゆゑなれば全く八雲立出雲八重垣妻こめに八重垣造る其八重垣の歌より三十一文  
 字に定まりし歌の徳なるゆへ是を見ては本朝の猫も抄子も歌は讀ねをならぬ者（もの）あれども此  
 三十一文字の歌（うた）は三鳥（さんてう）の傳（でん）だの三ヶの大事（だいじ）だの五義六義七病八賊（はちぞく）坏（く）とて種々六ヶ敷（た）興（き）義（ぎ）  
 があれば夫は兎もあれ世人としては老若男女貧賤等しく是非とも讀ねばならぬ品行歌とい  
 ふあり此歌の文字の敷も定まらず六ヶ敷興義もなければ師匠を取にも及ず其歌の壁へば親  
 が子に向ひて「夫の悪き事ゆへせよ」といふ上の句が出たらば其子（こ）「ハイと下の句を付て

歌  
強

産

細

物

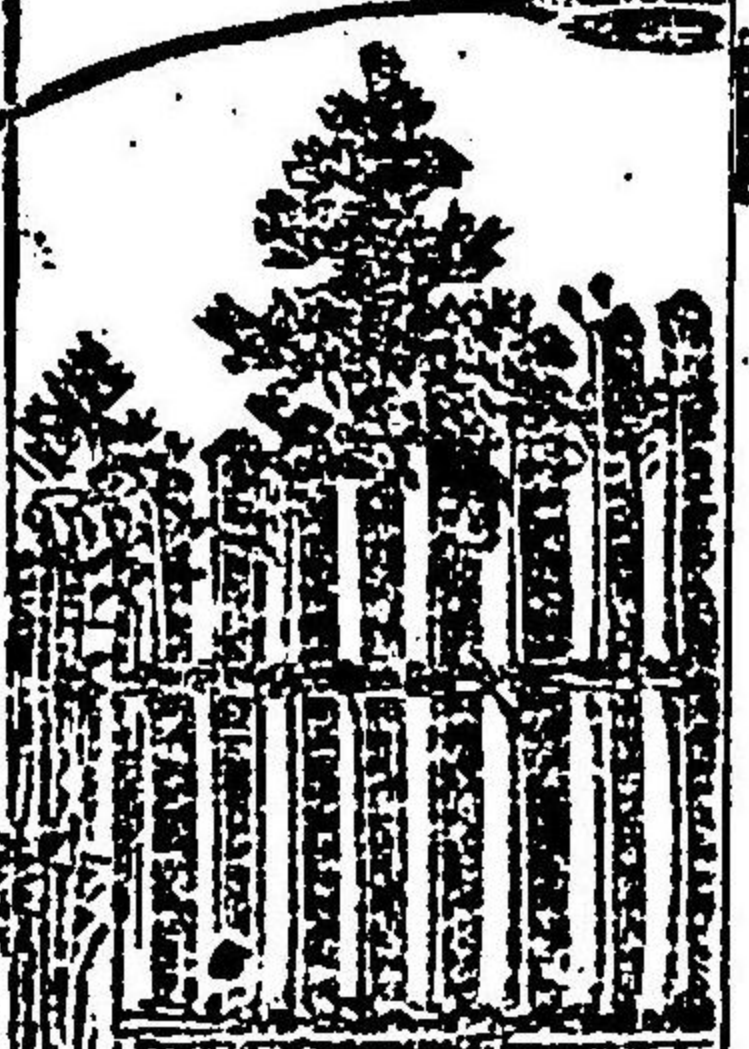
歌

園

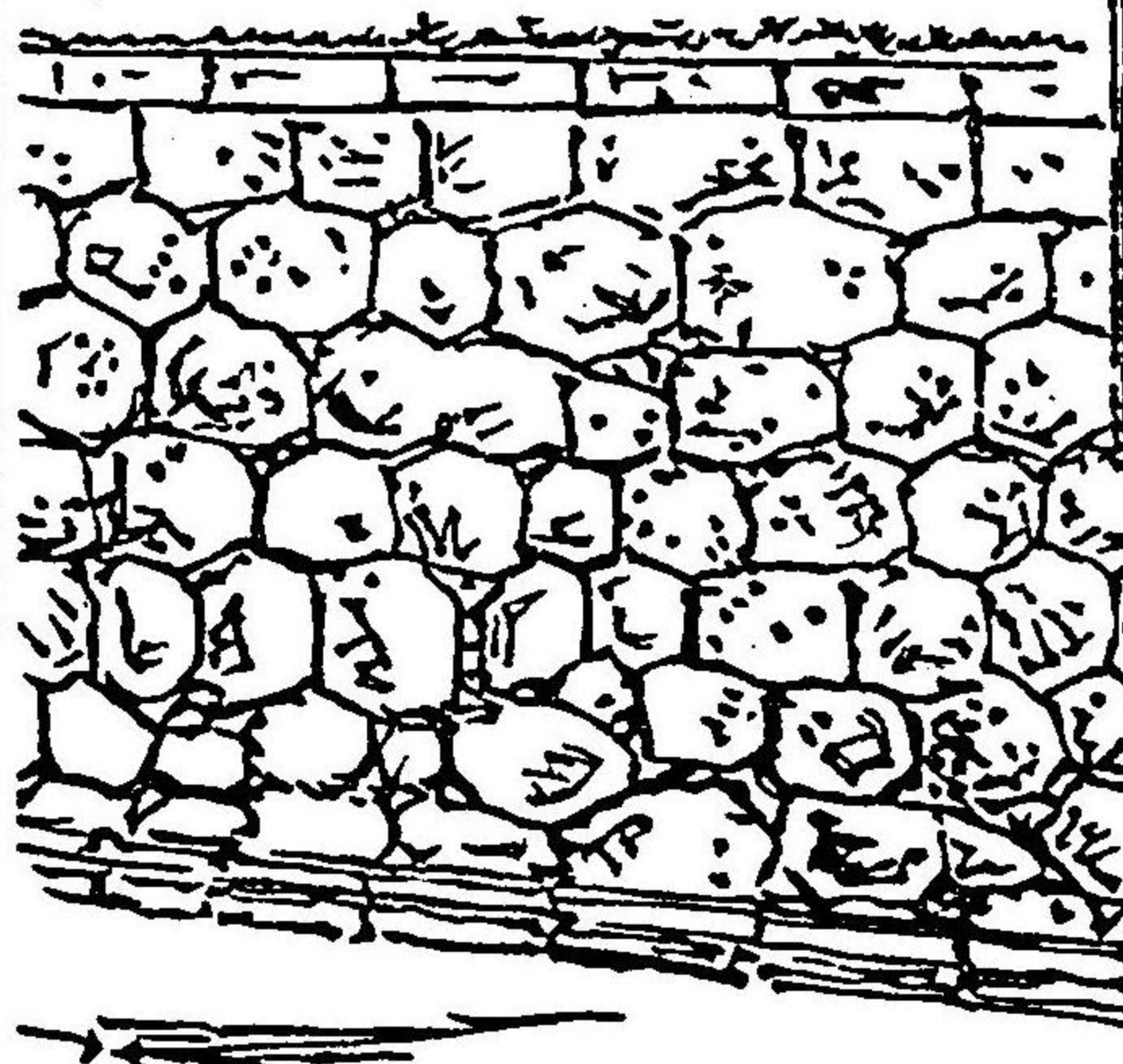
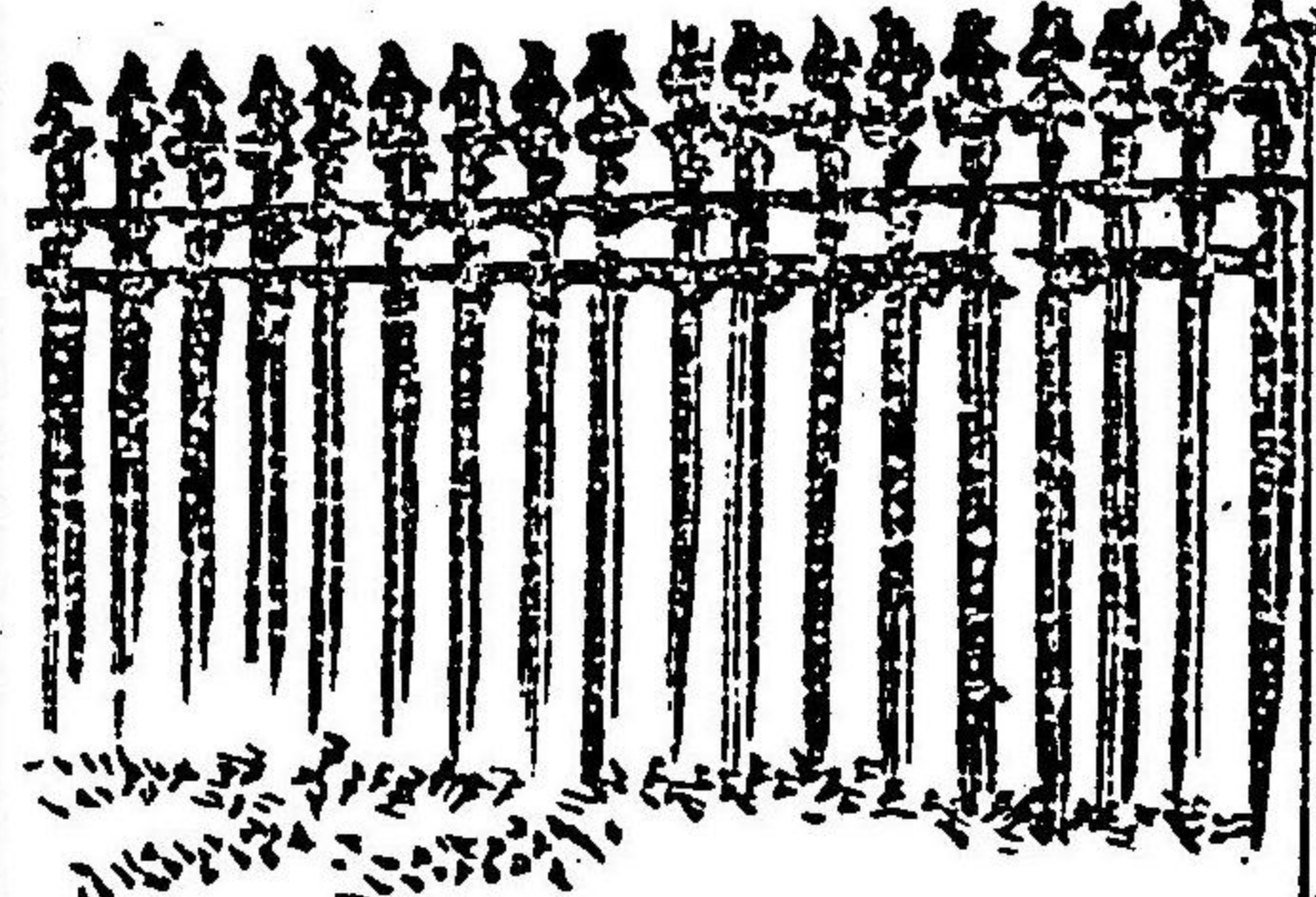
知

言

門



志立小学



新

不斷櫻

歌

花

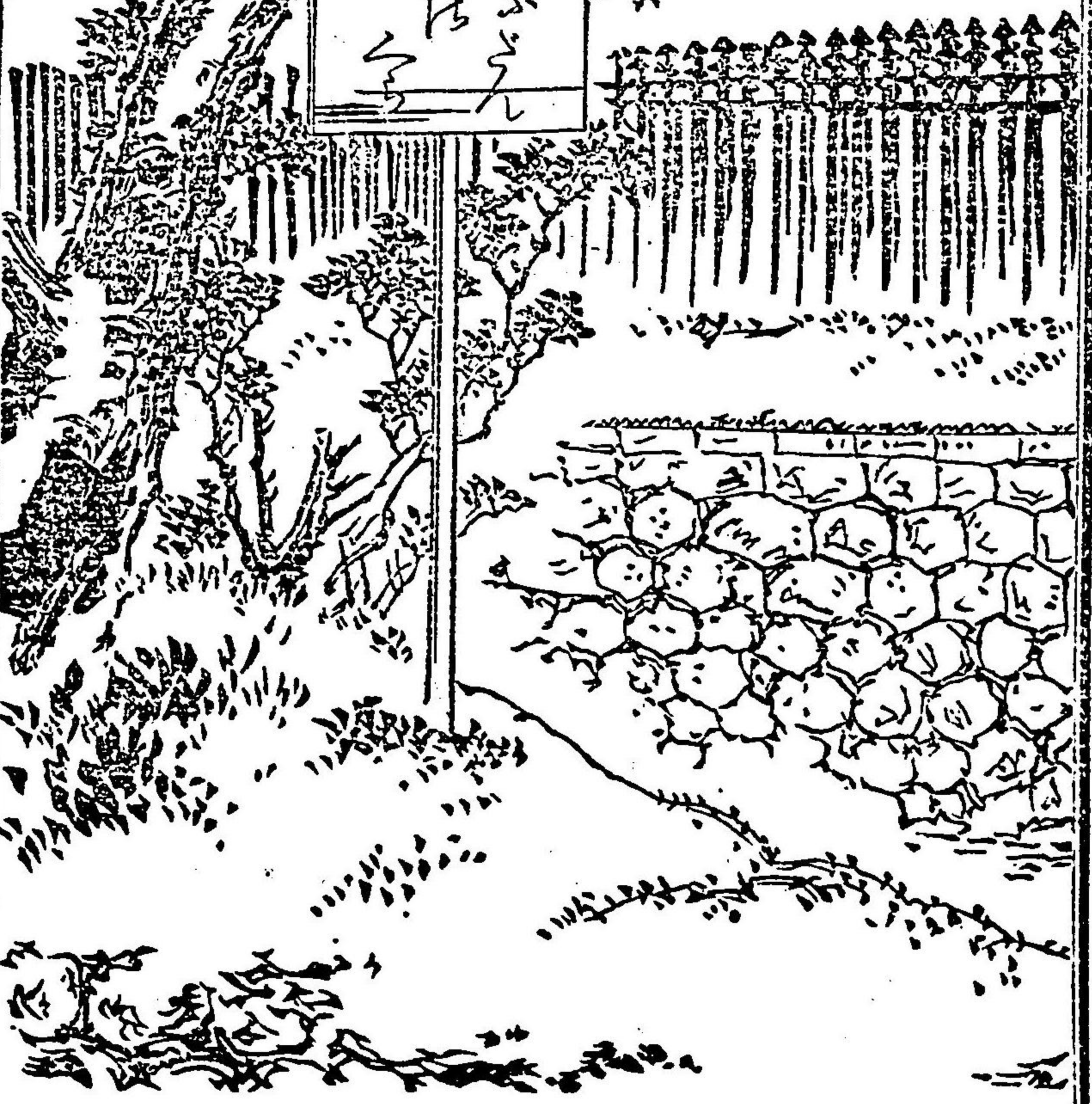
春

不斷

見

人

志立小学



其上の句に従ひ又旦那が子藏に向ひて「使に出たら道草をくわすに早く戻れとの上の句が出たら其子藏「ハイ」と下の句を附て其如くするを親子主従の品行歌の達人といふなり又身を錯りたる者政府の禁獄懲役を上の句として我意を改むるを下の句とする者は錯りより上達する歌人なるが咽元すざれば其時の下の句も違ふ者あり是は品行歌の盜賊にて教るに道なければ萬物の靈たる身を以て終に犬馬も等しき終りを遂るを見よ偕歌法師の金乞の歌を讀上て其里を立さり勉強山の志立小學校へ至りて見れば此學校に一人として腰抜の生徒はなく皆教師に一度手を取るれば夫を縁の綱として志を立るゆへ再び尻餅をついて落第することおければ旭の登るが如くに中學大學と及第して卒業すれども其中に細字をよみ又紙掩なき燈に向つて書を讀み人跡の日月とする大切の兩眼を悩す者あるを見てよめる

○勉強とするにも度あり厭ふもの讀かく細字燭の光線  
又勉強過て猶及ばざるが如き者あるを悼てよめる

○學問に凝固りの智を吐て雲に隠るゝほとゝぎす生

ト讀夫より常盤山の不斷櫻を見に行ければ常盤木の中に偕り秀たる名木の花爛熳と盛りな

れども是を見物する者一人もなきと不審ながら此下陰を宿とせば花や今宵の主なりらんと忠度の氣取にて暫く木影に憩ひける處へ突然と一老翁露れて此名木に向ひ

○物有本末事有終始知所先後則近道

ト唱へて立去けるを歌法師の見るより跳と立上りて花の高札の末へ誌せし歌に

○散ばころ花の賑ふ春もあれ不斷ざくらは見る人もなし

トかさければ草木情なしといへども此歌の心を感じけるにや散ことなき不斷櫻も忽ち雪の降如くに散始て松風に舞るを見て

翠松風彈琴  
白櫻飛舞曲

ト對句を唱へて去ける偕此不斷櫻の花散て終に青葉櫻となりけるを近邊の雅俗達見出し是までの散ざる花と見るは居間の壁に張たる錦繪を見るか如くに思ひて見にも行ざりしが青葉櫻と變りたる不思議は見すに居れずと見に行者も次第に殖けるもへ花もなき此常盤山へ俄に腰掛茶屋酒食の飯店まで立やせに至れば昔曲の師匠さん方も青弟子の賛成より青

款

羅の字を  
燭と質屋

去むとせ

流

報ひを抄

く

け

款

世のり

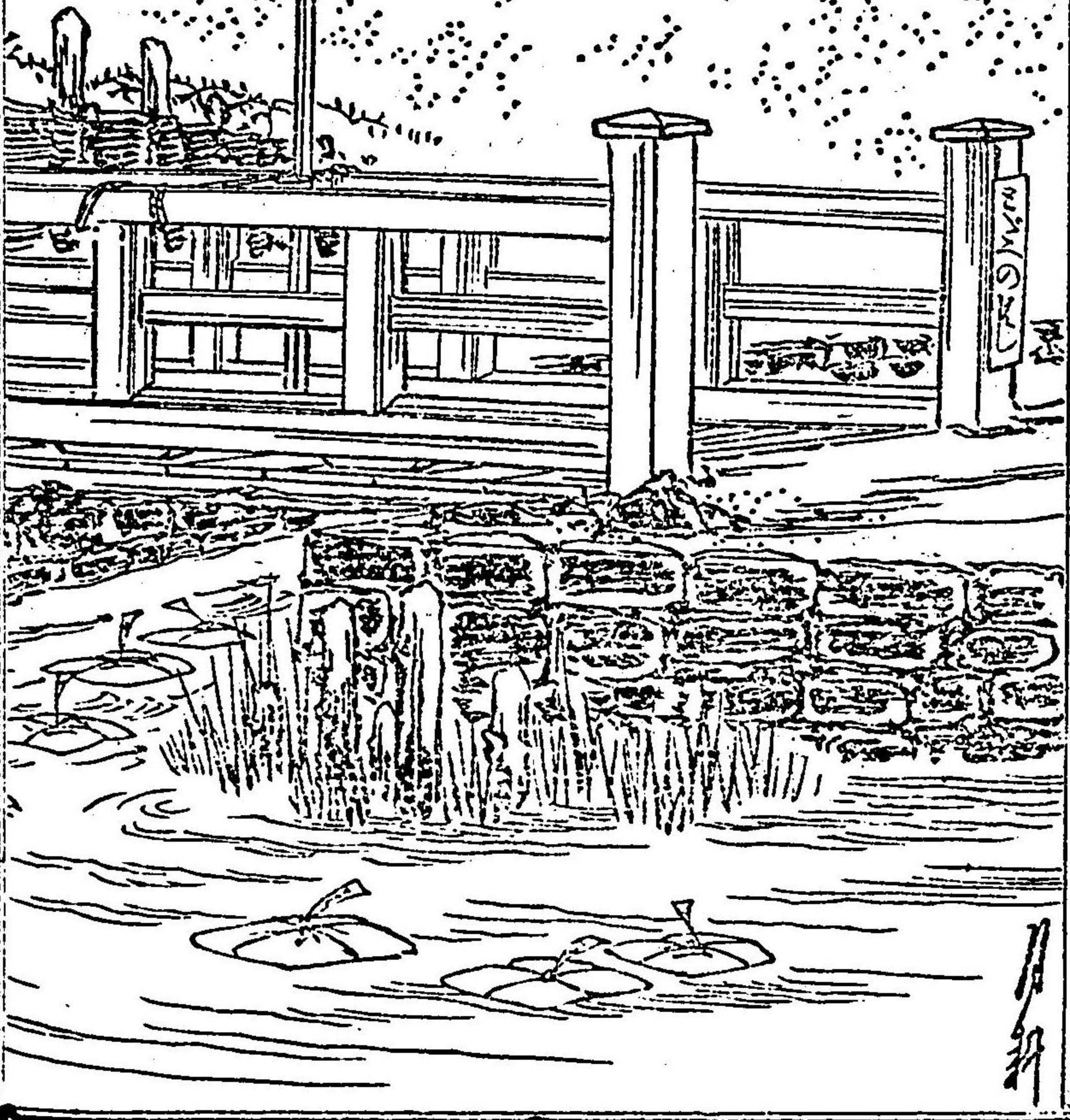
と

人馬  
停止

止

質

流



月

款

利益之揚場

引

流

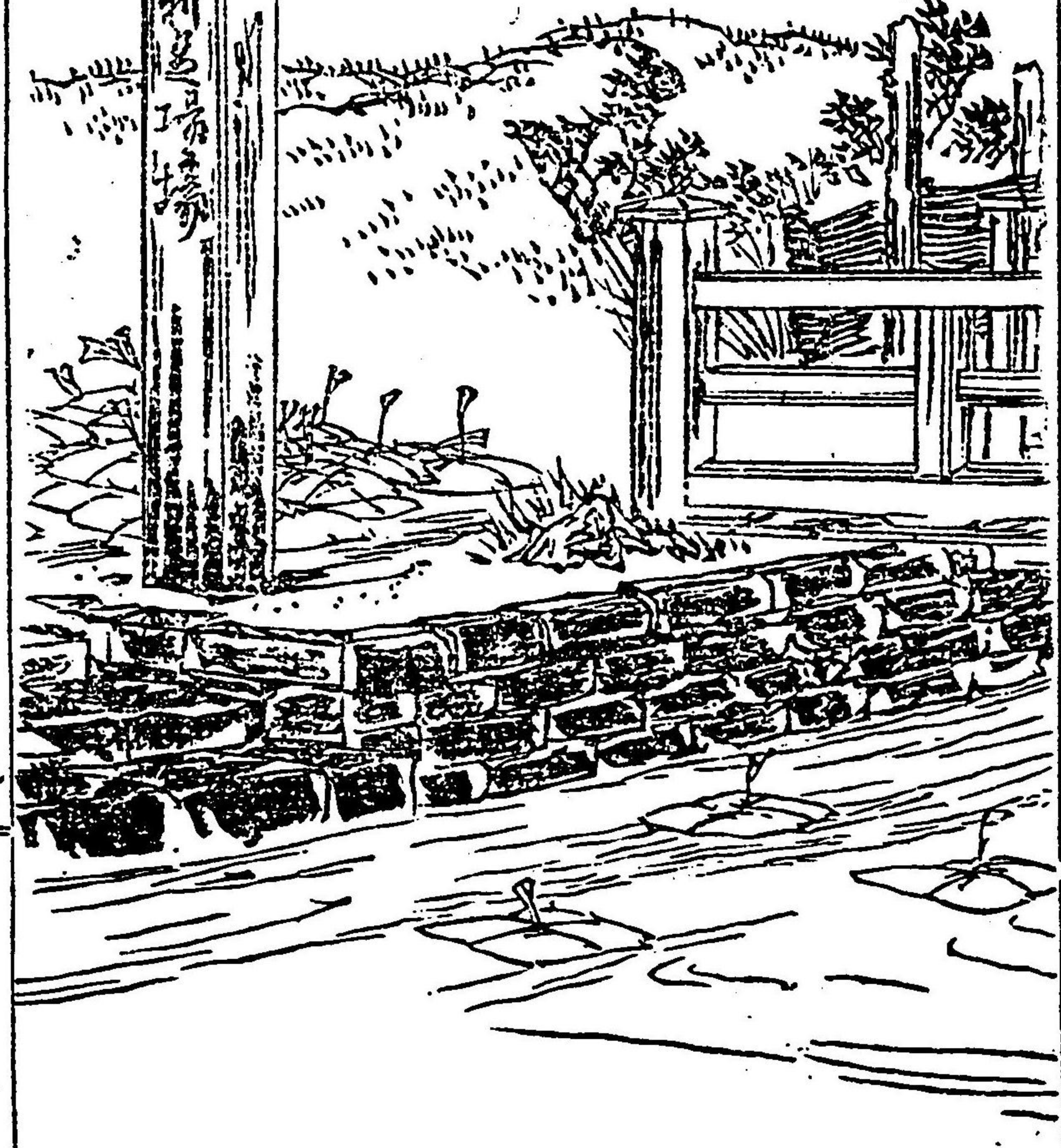
と

質の

利

と

英園寶物利益揚場



葉櫻の文字を染るる手拭の揃にて青葉見の催しあれハ青表紙の學校より青袴の遊歩もわ  
り青櫻よりは青傘にて練いざし青山からハ青毛の馬車まで出ける青尽の中に勢しく目に立  
ものハ赤隊の一群なり斯の如くの雑踏を見て此一本の櫻の根分を全國中へして不斷櫻の株  
をとり不斷の金儲をいたさ杯と目論者もありて此者見高き一山ハ雖も立る地もなく人の黒  
山となつて其日暮の團子飴菓子を買者まで其所を得るに至りまは桃李言ずして人自から市  
を爲の意にハあらず是ハ全く此一本の櫻の舊弊を改良したるところなる己偕歌法師は常盤  
山を下りて質屋川の淵を至りて見れば折しも八月の大雨ハ水嵩まして一切の道具類の流る  
ハ中に肩に鐵挺裾に碇を染し貫目のハ衣類さへべんべんと流るれば高金といへども目方  
のなさスキヤの帷子薩摩の上布當時流行安直の二子縞の羽織や單物或は蟻半半天股引杯よ  
至つては木の葉の如くに流る、此景色は大堰川を流る、花や瀬出山の紅葉の立川川を流る  
ハを見る装觀と違へば流石の歌よとも此質屋川の流を見ては胸うちぶれて一首の歌は思ひ  
もよらざ一言半句の詞も出ず只忙然と詠めいなりしが歌枕に出て名所へ歌を殘さぬも口惜  
きとて顔をしかめてよみたる歌に

○罪もなき蚊張を質屋に縛らせて流せし頼ひ蚊にくわれける

ト口をさみて目の前にある橋を渡らんとして其橋の名を見れば世渡り途絶の橋とある札を  
見ていまハしき名と思ひながら中央やと行ハ繩張を以て通行を止たる也ハ扱ハ橋の名ハ是  
なりと引返さんとせしがイヤましてしばしこゝも名所と欄干より下を見てよみける歌に

○世わりの途絶の橋ハ止れども流るハ質は止めてとまらず

ト讀すてハ立戻り川沿を僅り來れば諸物の積重である所あり是へ近よつて見れば捧抗ハ○  
共同物利足の揚場と印たるを見て扱はこゝが質屋川の流物を止る處と思ひて

○蠟燭の流ハ豆よ水ハ堰質の流ハ利で止るなり

ト讀て其處より氣を換て田方の道へおもむきければ万作村へ出ま也ハ其村の豊年を見てよ  
める

○米をくふふんでは米を培せども牛くふふんで牛ハこやさぜ

ト米の飯の徳を祝して夫より見切村へ出ける此村の畑は大安瓜ダ名物なれば畠へ入て其名  
物の大安瓜を詠め

万作村

歌

ふんぞり

米を

牛を

み

万作村  
見切村



今朝見れハ

一二

さ

千代の

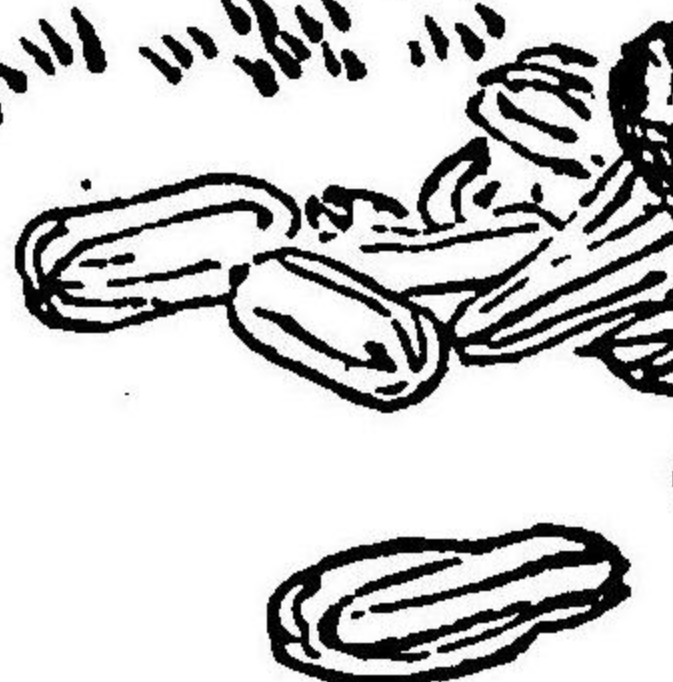
雨

歌

中比

瓜

瓜



月新

○安瓜の鳥の中のきりくすけふ瓜ぐひあすは瓜すへ

ト讀て草鞋の紐を結び直して居ければ目の前の案山子が忽ち烟主となりて「そこな老翁年に不足もなくて晝ひなう瓜を盗みよ来る已ならず見切村の烟主の榮譽を害す厭杯を讀らハ捧縛りにして世直しの人身御供に上んと覺繩を手操を見るよりは是のたまなぬ遊るが一の手と足を空に飛して走るあどより「そこな瓜盗人を捕へてくりやうやるまへぞ」と追かける聲に驚きて横丁へ曲らんとばければ傍の飯屋の中より「ヤ」と聲と掛られて引留られ此處に於て兪賊あふ次第は新聞の例に任せて又明日の後続に讀れども是より先になくく面白き名所澤山あれば必ず御覽あるべしと烟ついでに巳が烟へも水を引くと爾り

二 號の題目

- 市在立見の關
- 質屋川國利家鴨利の咄
- 矢毛野の緋罌粟
- 鴨燒茶屋
- 狂言堂蚤蚊の舞
- 折の身投橋

- 宮古川の太助船
- 犬の川端歩行
- 追秋の夜景色
- 同所追剽物
- 代歌の事

萬福天カラフル

出版御届 明治十八年十二月廿六日  
刻成出版 明治十九年三月一日

定價金二十五錢

編輯人

静岡縣平民

服部應賀

淺草區西三筋町五十貳番地

出版人

東京府平民

辻岡文助

日本橋區横山町三丁目貳番地

發兌所

金松堂

全所



免許 板權 釋迦八相倭文庫 万亭應賀著 狸々曉齋畫

全部六十五編大尾西洋綴頗美本 定價金五圓郵便稅自辨す

記事論說祝文例題 銅板全二冊 定價八十錢

菴頭 皇國文證大全 全一冊定價 金七拾五錢

菴頭 文章軌範讀本 全二冊定價 金六十錢

譯語 郵便稅自辨す

曲亭馬琴著 津本綴合本一冊 定價二圓四十錢

椿説弓張月 西洋仕立全一冊 定價壹圓五拾錢

繪本楠公記 西洋綴全一冊 定價金壹圓

青砥藤綱模稜案 洋本綴 全一冊定價金壹圓卅錢

石川五右衛門實記 洋本綴

繪本英雄美談 西洋仕立全一冊 定價壹圓五拾錢

繪本西遊記 西洋綴全一冊 定價壹圓五拾錢

護國女太平記 西洋綴全一冊 定價金七拾錢

讐討天下茶屋 西洋綴全一冊 定價金七拾錢

繪本柳荒美談 西洋綴全一冊 定價壹圓五拾錢

幡隨院長兵衛實記 西洋仕立 全一冊定價金七十錢

さらけ與三郎實記 西洋仕立 全一冊定價金七十錢

染崎延房編輯 半紙本全卅六卷 大尾定價金七圓

近世紀聞 大尾定價金七圓

渡邊文京編輯 初編より十編まで出版 以下近日定價廿五錢宛

通俗日本小史

東 京 圖 書 館

和書門

類

一函

七架

八號

一冊



特43

535

Chanpukus  
ルヲラカ天  
の



205332-000-4

特43-535

万福天カラフル

万亭 応賀/著

M19

EDV-0510

